

被災地へ派遣 今後も

震災3年

群馬の課題

中

住民と交流し復興計画

防災緑地の予定地を歩く橋本さん。撤去した家の基礎部分が積み上げられている（2月24日、福島県いわき市で）

「2年後には広大な緑地が完成する予定です。きつと、復興の実感が湧く場所になる」

津波で流された住宅の基礎部分が積み上がった福島県いわき市の久之浜・大久地区の海岸。橋本知明さん（39）は、津波から地区を守る防災緑地④の予定地を見渡しながら言った。

橋本さんは昨年4月、群

馬県馬 期限で 務所に の建設 防災緑 格的に 漁師 区は、 棟の建 上が燃 自に知



THE YOMIURI SHIMBUN

2014年(平成26年)

3月10日 月曜日

読賣新聞

ガレキと家の基礎部分だけ。「海が怖くなった」と嘆く住民もいた。「群馬県人にとって、海は気分が高まるもの。でも、ここに住む人は、津波の恐ろしさと隣り合わせで生活しているんだと思った」と振り返る。

橋本さんたちは緑地建設に向け、住民を訪問したり、ワークショップを開いたり

して意見を聞いた。交流の中で、取り壊す予定の秋葉神社が地域のシンボルだったことが分かった。「震災の記憶を伝える場所も残したい」。住民の要望を受け、計画を変更して神社を残し、その周辺を「記憶の伝承広場」とする構想にした。住民たちは安堵の表情を浮かべ、「残してくれたよかったです」と言葉を返してく

た。

久之浜・大久地区復興対策協議会の吉原二六会長（73）は「小学校や青年会議所にも飛び込んで話を聞いてくれた。一生懸命に久之浜のことを考えてくれた」と感謝する。

16日には防災緑地の予定地で、住民らとマツを植樹する予定だ。橋本さんは「被災地が少しでも早く活気を取り戻せるよう手伝いたかった。緑地が完成すれば地区を離れた人も戻る気がする」と考えている。

震災後、被災地へ派遣された群馬県職員は、福島県が297人、宮城県296人、岩手県13人、茨城県1人。市町村も800人以上を派遣し、津波被害地の復旧や文化財の保護、被災者の心のケアなどに当たった。県は来年度も派遣を続けていく方針だ。

橋本さんは「被災地を忘れていないと足を運ぶ人が増えれば、久之浜の人たちはきつと喜ぶ」と指摘する。自身も、群馬に戻った後も自分なりの支援を続けようと決めている。

業界で連携 草の根支援

桐生市や太田市などで町工場の経営支援などを手掛けていた会社の有志は、業界のつながりを生かし、独自に被災地支援をしている。社長だった登内芳也さん（47）は昨年7月から岩手県北上市に住み、草の根の支援を続けている。

メンバーは、2009年に群馬や栃木県の繊維関係会社など6社が集まって設立した「下請の底力」（解散）の有志。震災直後の11年3月中旬、交流のあった



震災後に発行した新聞を手に、継続的な支援の必要性を訴える登内さん（岩手県北上市で）

設住宅の女性約60人に、綿の切れ端を渡してクリスマス飾り作りの仕事を依頼し、東京の百貨店などに売り込んだ。売り上げは1000万円を超え、漁船の再建費用にもなったという。

被災地での活動が評価され、登内さんは昨年7月、岩手県北上市で活動する国の復興支援員になった。現在、同市のアパートに住み、支援している。感じているのは、被災地の支援団体の疲弊だ。「資金難で撤退する団体もある」と、納税目的を指定できるふるさと納税などを通じた資金確保策を模索している。

宮城県沿岸部に向け、水や食料を車で運んだ。その後は、約10人が交代で岩手、宮城の沿岸部などで

被災地に通い、倉庫に残った水産加工品をインターネットなどで販売。宮城県の石巻市や南三陸町では、仮